血と汗で歩いた13年

闘いの経験を生かすのは今だ

家族ぐるみで戦列強化

態勢をかためよう

いまわしい戦争が終つたあと、廃墟のなかで組合が結成されてから十三年たつた。それはすべて敵の攻撃との闘いにあけくれた十三年だつた。その中でわれわれは、幾多の起伏を経て、たえず前進してきた。

いま、その本性を露骨にあらわしてきた軍反動政府の、日本をふたたび軍国主義にひきずりこもうとする政策の一環としてだされた日米安保条約改訂や警職法改悪など一連の反動政策との闘い、またつねに彼らがそうしてきたように、不況のしわよせの一切をわれわれにおしつけようとする企業合理化の攻撃と闘う態勢をかため、反撃にたちあがつているとき、過去十三年の闘いのあしあとをふりかえり正しい教訓をくみとることは、大切なことである。

以下きわめて不十分であるが、その点は身をもつて闘つてきた組合員とその家族の体験でおぎなうことにし、大まかに十三年間の主な闘いをふりかえり、いままでの闘いの経験をいかし、現在しかけられているあらゆる敵の攻撃を正しくみつめ、着実な闘いを進めていくきつかけとしたい。

混乱の中に結成

戦の名を借りた侵略戦争はその宿命によつてやぶれるべくしてやぶれた。終戦によつて社会秩序は破壊、逆転してしまい、世は虚脱状態におちいつた。

三池炭鉱での生産も、一時中国人朝鮮人など外国人の手にわたされた恰好で、無秩序無生産状態におちいり、わずかばかりの生産も従来の惰性でなされていそにすぎなかつた。そのようななかで、あたらしい秩序が要求され、戦争中の産業報国会が解散され労働組合がうまれた。

昭和二十年十二月、まず三川鉱労働組合が結成され、二十一年二月三日には三池炭鉱労働組合が結成された。当時の労働組合の活動は主として秩序回復のため配給物資の強奪、弁当の強奪などの対策や配給の公正、待遇の改善などをとりあげていた。

二十一年三月、賃金引あげ、退職金増額などで組合結成後初の争議が行われた。五日間のストライキがうたれ、その過程で闘争方針問題で三川支部が脱退する騒ぎもおこつた。しかし、脱退した三川支部も妥結条件では三鉱労組と同一条件を無条件に呑まなければならず、分裂の無益有害をさとつた。これを貴重な教訓として一時脱退した同支部も三鉱労組の戦列に復帰した。

三月闘争にさきんじて待遇改善闘争の歩調を揃える目的で、九州三山（三池・田川・山野）は代表者会議をひらき、三井炭山九州連合協議会の結成をし、西鉱連成立の素地をつくつた。こうして二十一年五月に西鉱連が結成された。西鉱連では労働協約を要求し、はじめて労働協約を結ぶにいたつた。

二十一年当時は非常に食糧事情が悪く、坑内労働者で昼食をぬきに炭デー〃をつくつたり〃食糧増配感謝増産運動〃など増産にいそしんだ時代があつた。会社も、特配や奨励金をだし増産を奨励した。それもやがて増産への餌の役割りをはたした食糧や物資の特配も引きあげられた労働強度とくらべるとあまりにも少なすぎることがあきらかになり、特配物資なども感謝の対象でなくなつてきた。

戦後の産業復興に必要な、基礎産業としての増産、占領軍政策などで一面労資協調主義的な生産主義も、本来の労資協調を意味するものではなく、敗戦後の異常な石炭不足と食糧不足、なおその上に財閥独占企業としての三井三池炭鉱の組合という事情から生じた、労資協調の生産主義であるにすぎなかつた。だから、その労資協調にはやがて限界がきた。炭鉱労働者の食糧不足を解決しなければ、石炭はでないという声とともに、政府が要請する増産にみあう食糧増配をするはずがないし、労働者にとつては食糧増配よりも賃金の上昇や労働条件、保安問題が解決されなければならないということが労働者の意識にのぼつてきて、その解決への意図がわいてきた。

期待の中に三鉱連結成

二十四年三月、西鉱連と北三連とが連合し三鉱連が誕生した。三鉱連結成の前後、会社は組合への事務所、委員給与などの援助打きりや賃金分割払いなどの攻撃をくわえてきた。一方、職場での入坑遅延や、主食闇売デモなどが行われ三鉱労組が三種分立を行つたのもその当時だつた。

労働協約や労働条件などの懸案を解決することは、すべて三鉱連で闘わねばならないという意識をもち、全組合員が闘う組織として、はつきり三鉱連を認識した。力をあわせてさらにこれを育成強化しなければならないという大きな期待をかけられた三鉱連にたいする第一の試練は皮肉にも人員整理問題だつた。

二十四年七月一日、国鉄労組にたいし下山総裁から九万五千名にのぼる人員整理が発表された。その翌日三井鉱山も人員整理の一般基準を発表してきた。それは、生産の二十%が月月貯炭となつており経営の見通しがたたないので経営を確立するために、生産に寄与しない人は辞めてもらいたい、停年制の実施で人員整理をしたい、事業場は高品位炭生産のほうに振換をしたいということで、出勤不良者、職務怠慢者、業務阻害者、法規違反者、低能率者、病弱者、その他を基準として三鉱連全山で二・七八一名、三池で一・二六六名の首切りをだしてきた。

これにたいして三鉱連は首切り反対闘争を組織し、三池ではとくに家族との提携に注目、二五〇人に一人の割合で闘争連絡員を選抜して、執行部と職場、家族をふくめた体制づくりを行つた。闘争資金の確立、生活資金カンパの計画、職場分会、居住区単位の行商班の組織などを行い、闘う体制を固めたが、三鉱連は諸種の事情を判断した結果、団体交渉で一般基準を緩和し人員整理を認めたのである。三池では四九三名の整理を会社が提示したが、組合は精力的な交渉の結果三三六名までにこぎつけ人員整理問題はおちついた。しかしこの人員整理と前後して山を去つて行つた人は九五四名になつており、組合会社協定による三三六名のほかに数多くの仲間がいわゆる〃肩たたき〃によつて山を去つたことが注目される。

六十三日ストに組合員の盛り上りはすさまじかつた。（上）保安要員引上げで三川鉱前にピケを張つた（下）主婦は生活対策に乗出した

レッドパージに便乗した会社側

二十五年五月三日の憲法記念日にマツカーサーは声明を発し、そのなかで日本共産党の破壊的性格をするどく非難し、共産党非合法化をねらつた。これは六月二十五日の朝鮮事変の勃発と作為的なつながりがあつたもので、共産党中央委員の追放などに関する吉田首相宛のマ書簡となつてあらわれ、新聞、放送関係を皮切りに全産業で赤追放が実施された。

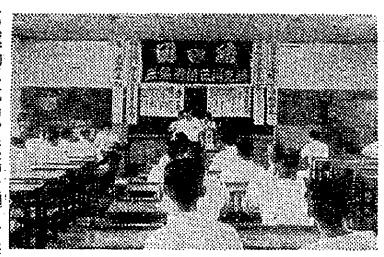
この「レッド・パージ」によつて馘首されたものは官庁関係で一、二〇〇名、民間産業は約二一、〇〇〇名におよんだ。そのうち石炭産業では約二、〇〇〇名。このような大量な活動家分子の追放については、もちろん抵抗はあつたが云うほどの成功を収めることができなかつた。そのなかでとくに三井鉱山のやり方はひどく、張本人のG・H・Qエーミス氏さえ三井案は行きすぎだというほどであつた。三鉱連は団交で会社側の当初の案を撤回させ、三日間の団交のあと、三鉱連とのあいだに特申手続きを認め、退職給与などをふくむ協定書を結んだ。これによつて結局、三鉱連全山で四五五名が馘首されることになつた。うち三池は一九七名であつた。

会社は赤追放のカクレ蓑によつて当時の組合の活動家を一挙に斬り捨てて御用組合化し、来るべき大量の人員整理の実をあげようとしていた。

筋書き通りに会社は二十五年十一月、三鉱連にたいし希望退職募集の申入れをしてきた。会社の提案は経営を正常化するため能率を引上げ、八、五〇〇名を目標に人員整理をしたいというのであつた。組合は退職したいものがあればこれを引きとめるわけには行くまい希望退職は純粋の希望者だけにとどめ会社の強制によるものであつてはならないとの立場で、団交を行い希望退職に関する協定が成立した。この協定によつて退職したものは三池で四、六四七名にのぼつたが、それは奇酷なばかりの強制解雇だつたといわれている。

地方議会に進出

二十五年六月の参議院選挙に全国区から山川社長が立候補した。組合では「保守党が肥れば労働者が痩せる。資本家の代表に投票するものは賃金が安いという資格はない」などのスローガンを掲げ啓蒙活動に力をいれた。だが、投票の結果大牟田市で山川社長が得た票は二八・〇〇〇票におよんでおりこの地の全国区有効票の四割をかくとくしていた。もちろん、選挙運動のため来山した山川社長にたいし、当時賃金闘争中でもあり執行部は選挙よりも賃上げだと抗議し、四山、三川の支部委員会は〃東京に帰れ〃という決議をつきつけた。また、一部には選挙トラックを赤旗でとりまくなどの動きもあつたが、組合機関として、山川社長の立候補対策を審議したときは、山川反対の線を明確にうちだせないという声さえもあり、山川派の運動は職場、社宅を通じて活ぱつに行われ、社長の浜山を整列し最敬礼で迎えるのを当然とする職制や、世話方を通じて選挙運動はおしすすめられた。



この選挙とくらべて翌二十六年四月の地方選挙では、労働者はかなりの前進をしめした。福岡県議に阿員根組合長、大牟田市議に十名荒尾市議に七名、高田村議に一名を公認で立候補させ闘つたが、結果はかんばしくなく、大牟田市議に二名、荒尾一名、高田村一名の当選と、県会議員に阿員根組合長の当選をみた。

教訓残した労闘

翌二十七年、講和成立後の支配権確立をはかるため、独占資本はあいついで弾圧法規を作案したが、これにたいし総評は二十七年春以降「労働法規改悪反対闘争委員会」（略称、労闘）を組織し立上つた。労闘ストは第一波を四月十二日に予定、炭労もこれに参加したが、突然中止され、炭労組織内の大問題となつた。三池における闘争態勢は長期にわたる教宣活動ですでにもりあがつていた。だが第一波スト回避後、会社はいろいろな分裂策動をこころみ切崩しにかかつたが、これを頑としてはねかえす体制ができあがつていた。だが全国的な実力行使の実情は低調で、労闘の一年あまりの闘いの甲斐もなく破防法は成立した。しかし未曾有の労働者動員と複雑な運動の体験は自己批判を通じ、つぎの闘いに豊富な教訓をのこした。

63ストで意識高まる

二十七年には歴史的な六十三日にわたる賃金ストが展開された。賃金引上げを要求し、十月十七日全山一斉ストライキに突入して六十三日にわたる血のにじむような激しい闘いをつづけ、結果は保安要員総引あげという事態にはいり、各山ではピケをはり会社側の保安要員入坑に備え、激しく闘つたが政府の緊急調整発動によつて、ついに中労委会長中山私案による七%の賃上げで闘いは終つた。この六十三日の闘いで組合員は行商やアルバイトにでて粘りづよく闘いそのなかで闘う意識をもりあげ、主婦も労働者の主婦としての自覚を深めていつた。一方、地域分会もこの闘いのなかからぞくぞくと組織されていつた。

緊急調整をうけて終止符をうつた六十三日の闘いのなかから炭労は機械的な能負い闘争でなく、大衆闘争で闘つて行かねばならない貴重な教訓を学び、これを「自己批判」とし、つぎの闘いへの力量をたかめた。

炭婦協の結成

六十三日ストを通じて主婦との提携の必要を痛感した組合は、六十三日ストのなかで芽生えてきた主婦のもりあがりを基礎に、炭婦協結成にかかつた。会社はそれにたいして、それまで生活改善中央集会などで主婦を手なづけ、炭鉱の主婦が闘いに立上ることを押えていたので、炭婦協結成にたいする猛烈な妨害にでてきた。組合は全組織をあげて会社の妨害と闘い、炭婦協結成に力をそそぎ、言語に絶する会社の妨害のなかでそぐわと炭婦協を結成していつた。こうして六十三日スト、炭婦協結成を契機に、三池の闘う素地が形づくられ、つぎの忘れられない一三日の闘いに移つていつた。

組合結成後13年のうつりかわり

組合員数と出炭

内訳＼年度	三鉱連全山 坑内	三鉱連全山 坑外	三鉱連全山 計	三池 坑内	三池 坑外	三池 計	三池の出炭 月産	三池の出炭 年産	備考
S 21				9,548	12,307	21,855	105,873	1,521,309	三鉱労組結成
22				11,482	14,285	25,767	136,088	1,827,658	
23				13,439	14,935	28,374	156,000	1,966,700	三鉱連結成
24	38,061	34,116	72,177	13,829	14,069	27,898	184,500	2,105,600	一般基準による人員整理
25	34,441	25,908	60,349	12,776	12,296	25,072	127,600	2,037,900	レッドパージ、希望退職による人員整理
26	27,624	19,788	47,412	10,065	9,121	19,186	166,000	2,261,300	
27	28,112	19,292	47,404	10,109	8,650	18,759	190,500	2,037,900	63スト
28	28,181	18,983	47,164	9,966	8,453	18,419	209,200	1,644,400	113日の企業整備反対闘争
29	26,348	16,083	42,431	9,474	7,046	16,520	186,500	2,002,700	
30	25,966	15,814	41,780	9,453	7,010	16,463	147,400	1,906,100	43スト、長計協定締結
31	25,736	15,784	41,520	9,481	6,950	16,431	185,200	2,073,700	
32	25,899	15,666	41,565	9,530	6,938	16,468	194,800	2,186,000	
33	26,358	15,735	42,093	9,630	6,924	16,554	177,900		